

# 未来開いた濃い1年

鈴木冬一(21) =ローザンヌ・スポーツDF=

15歳から年代別の日本代表に毎年選ばれ、17歳の時に2種登録でJリーグデビュー。周りからはエリート街道を歩んでいるように見えたが、世界大会で同年代

「僕の未来に光をともしてくれた。人生の懸け橋になつてくれた。今まで一番濃い1年間です」

現在、スイス1部リーグで活躍中の鈴木冬一(21)は「ローザンヌ・スポーツDF」は異色の経歴で注目を集めた。高校3年になる春、セレッソ大阪から小嶺忠敏(16)がいる長崎総合科学大付へ「電撃移籍」。第97回全国高校選手権(2018年度)に出場し、文字通り「最初で最後の選手権」を経験した。Jリーグから高校サッカーへの転身は当時、少なからず物議を醸したが、1人のサッカー選手にとって大きな転機になったことは確かだ。

高校3年になる春、セレッソ大阪から小嶺忠敏(16)がいる長崎総合科学大付へ「電撃移籍」。第97回全国高校選手権(2018年度)に出場し、文字通り「最初で最後の選手権」を経験した。Jリーグから高校サッカーへの転身は当時、少なからず物議を醸したが、1人のサッカー選手にとって大きな転機になったことは確かだ。

選手権と

小嶺先生



4



「最初で最後の選手権」に出場した高校3年時。「小嶺先生に18回目の全国優勝を」と背番号18を選んだ  
=2019年1月、さいたま市の浦和駒場スタジアム

すずき・といち C大阪の下部組織で育ち、17歳の時にC大阪U-23に2種登録してJ3デビュー。高校最後の1年間を長崎総合科学大付高で過ごし、全国選手権3回戦まで進んだ。卒業後、J1湘南で2年間プレーして、スイス1部ローザンヌへ移籍。大阪府出身。

## 「勝負の根底にあるのは人間力」

と体をぶつけるたびに危機感を募らせていた。「今のままの成長速度では、たぶん俺は通用しなくなる」。サッカーも私生活も不自由なく過ごしている。だが、何か物足りない。1800度違うような環境こそ、今の自分に必要なんじゃないか。そう思い立って「部活」の世界に飛び込んだ。

実績を見れば、青森山田など選択肢は他にもあったが、欲していたのは自らの壁を壊してくれるような場所。「日本一の練習をやる」という小嶺の存在が決め手になり、単身長崎へ渡った。求めるものがそこにはあった。公式戦の2倍近い時間設定の紅白戦をこなし、終了後はそれ以上に過酷なフィジカルトレーニングが待っていた。理不尽にも映る練習を乗り越えるうちに、仲間との絆が育まれた。新鮮だった。

「練習は苦しい。だからこそ支え合える。途中から入ってきた俺を、みんな快く受け入れてくれた。絶対にみんなと全国優勝したい。そんな気持ちにさせてくれた」

走り込みの際、自然と先頭で引く張る自分がいた。泥くささ、自己犠牲の精神。勝つために必要なメンタリティーが養われた。小嶺から「勝負の根底にあるのは人間力」だと学んだ。

選手権本番で背番号18を背負ったのは「先生に18度目の全国優勝を届けたい」という恩返しのような気持ちから。開会式の入場行進で誰よりも腕を振り上げ、直後にインフルエンザで寝込んだ。でも試合に強行出場した。帝京長岡(新潟)との3回戦は自らの足で先制ゴール。逆転負けしても気丈に振る舞い、仲間の肩を抱きかかえながら去る姿に充実感がじんじんでいた。

◆ ◆ ◆

昨年末。20歳になっていた鈴木は、3年前と同じくらいの大きな決断をした。J1の湘南ベルマーレから、欧州へ移籍。そして7月に今シーズンの開幕する。と、早速主力の座をつかんでいる。

◆ ◆ ◆

「今は、やれるところまでとことん突き進もうと思っ」あの春と変わらず、自らの可能性をたくましく切り開いている。(敬称略)



19歳にしてU-22日本代表に選出され、長崎での凱旋試合に出場した鈴木  
=2019年12月、諫早市のトランスコスモススタジアム長崎